IMPACT Journalism Day by Sparknews

i Hasht e Subh El Watan LA NACION AZERNEWS DELO The Daily Star LE SOIR L'Économiste du Faso 10VOR10-SRF Le Messager EL TIEMPO POLITIKEN KOMPAS RESPEKT Al Masry Al Youm LE FIGARO Mon Quotidien El Heraldo Fraternité Matin l'actu THE IRISH TIMES L'Orient LE JOUR l'express EL PAIS L'Économiste THE NATION Folha de S.Paulo The Asahi Shimbun Dong-A-Ilbo RZECZPOSPOLITA le soleil Kommersant THE STRAITS TIMES Le Courrier de Russie City PRESS THE PHILIPPINE STAR 24 heures Tages-Anzeiger la Regione KHAO SOD THE HINDU T24 Tribune de Genève The China Post USA Today HAARETZ La Presse AJ+ EGYPT INDEPENDENT Les Échos du Nord Positive.News Daily Monitor H ΚΑΘΗΜΕΡΙΝΗ CORRIERE INNOVAZIONE Jeune Afrique

Today, 50 of the world's leading newspapers are publishing, in more than 40 countries, 60 positive innovations that are changing the world. #StoryOfChange

世界の課題 解くヒント

インパクト・ジャーナリズムの日

国際報道キャンペーン「インパクト・ジャーナリズムの日」が24日、５年目を迎えました。難民や貧困、気候変動。世界を悩ます様々な課題を解決する道筋を示し、明日への希望につなげたい。そんな思いでメディアＮＰＯスパークニュース（本部・パリ）が呼びかけました。今年は40カ国から朝日新聞を含む計50の新聞やニュースサイトが参加。一部の記事を抄訳し、お届けします。

デジタル版で、ほかの記事も読めます

豊かな海 タコ禁漁から

i ＠マダガスカル

マダガスカルの海でタコを捕まえる漁師。数日中にスペインや日本の食卓に上る

マダガスカルの沿岸は生き物であふれていた。しかし、外国船による乱獲と気候変動による極端な天気、森林伐採による土壌流出などで、海が衰え、人々の生活の質も下がった。

海洋保護区を設定する場合、地元の漁民に背景説明がなかったり、収入が減る漁民への補償が十分でなかったりするのが通例だ。結果として、保護活動家と地元住民がにらみ合うことがよくある。そんな中、環境保護団体「ブルー・ベンチャーズ」（本部・ロンドン）のアラスター・ハリスさんはタコを使って、疑い深い住民と連携している。

タコが理想的なのは成長が早いからだ。少しの間、禁漁区を設けるだけで成果が表れる。「タコを保護することが第一の目的ではない。幅広い生態系を守るための媒介に使う。素早く回復すれば、反対していた住民とも対話できるようになり、永続的な保護区をつくることにもつなげられる」とハリスさんは話す。

タコの漁区の４分の１を３カ月禁漁にすると、解禁後の漁獲は倍になる。漁獲量が元に戻るのは約２カ月後。１区画が禁漁となっている間に、残りの区画で漁をすれば年間の漁獲は安定する。漁民によると、各区画を年に２回禁漁にすれば、漁区全体の魚の量が復活する。

10年前、マダガスカルには海洋保護区が一つもなかった。タコを使った取り組みが各地に広がり、今では１００以上の海洋保護区が設けられているという。このような取り組みは東ティモールやモザンビーク、インドネシアでも行われているという。（アイ〈英国〉）

少女オケ 希望の象徴

＠アフガニスタン

アフガニスタン国立音楽専門学校の少女だけによるオーケストラのメンバー

HASHT E SUBH

アフガニスタン国立音楽専門学校にある教室の一室で、アフガニスタン人の少女ザリファ・アディーブさんがバイオリンを弾いている。ポップ歌手を夢見てきたが、最近になってクラシック音楽に対する熱意がわき上がってきたという。

彼女は１歳の時に家族とパキスタンに逃れ、そこで15歳まで暮らした。２０１４年末に帰国し、２年間、この学校でバイオリンを習った。10年前には、こうした音楽の授業は完全に禁止されていた。

学校は１９７４年に設立され、88年まで続いた。だが、戦争により中止され、武装勢力タリバーン政権下は音楽を「反イスラム」として違法とした。

学校が再開したのは、カルザイ元大統領が就任した時だった。２００８年、現校長アフマド・ナセル・サルマストさんが、世界銀行から資金援助を受けた「アフガン音楽の復興」という計画を始めた。

少女75人を含む生徒２５０人が在籍し、アフガン初の少女だけのオーケストラがある。メンバーは12～21歳で、様々な国際的な式典に参加する。

毎年、３００～４００人が入試に臨み、合格はわずか50人。受験者のうちほぼ半数が、ホームレスか孤児だ。

学校では裕福な子も孤児も、同じ屋根の下で授業を受ける。彼らは痛みや希望、喜び、悲しみといった感情を音で表現する。サルマスト校長は「本校は暗闇の中にある希望の島のような、未来のアフガンの象徴なのです」と話す。

（ハシュテ・ソブフ〈アフガニスタン〉）

見えなくても 指で感じて

DELO ＠スロベニア

視覚障害児の施設に通う少女ミアさんが使う「フィーリフ」は、画面に凹凸のあるタブレット端末だ。彼女は震動する部分を指で追い、四角い形を上手になぞる。

これに似た機械は以前にもあったが、５万ユーロ（約６００万円）と高額だった。フィーリフの価格はその１００分の１だ。

スロベニアのデジタル関連会社の創業者、セルジコ・ヘルマイヤーさんがフィーリフを発明した。２０１３年、ヘルマイヤーさんはドキュメンタリー番組を見ている時、アイデアを思いついたという。番組では、耳と目が不自由な人たちを取り上げていた。視覚を失うことで多くの経験を奪われ、機器が高価なせいでコミュニケーションが取れず、周囲の世界と遮断されている。ヘルマイヤーさんは心を揺さぶられた。

ヘルマイヤーさんは画面上に浮かび上がる形を、震動や音、声によって指で識別できる技術を考案。画面に凹凸があるため、利用者は指を思い通りの方向に動かせる。

病気で視覚を失ったダムジャン君(10)は「絵を描く時、鉛筆では形を感じられないけど、フィーリフでは感じられます」と喜ぶ。

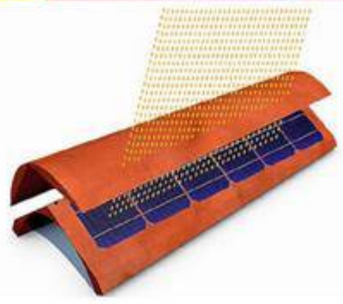
国連教育科学文化機関（ユネスコ）は、フィーリフを世界の優れた発明品のトップ１５０の一つに挙げている。ヘルマイヤーさんは、中・東欧で影響力のある発明家１００人のうちの一人となった。

（デロ〈スロベニア〉）

視覚障害者のために開発されたタブレット端末「フィーリフ」を使う子ども

景観乱さぬ 太陽光パネル

CORRIERE INNOVAZIONE ＠イタリア



下 太陽光発電パネルのイラスト
上 イタリアの伝統的な建築物にも合う太陽光発電パネル

欧州の歴史的地区で建造物に太陽光発電パネルを取り付ける許可を得るのは大変だ。景観規制が厳しく、パネルを見えないようにしないと許可されない。

これまではパネルを隠したり、屋根材や石材に埋め込んだり、目隠しの壁で覆ったりしてきた。ただ、一定の高さから見れば黒いパネルが見えてしまう。

イタリア北部ビチェンツァの企業「ダイアクア」は「見えないソーラー」という製品を開発した。

太陽光パネルを、石や木などのありふれた建材を模した高分子化合物に埋め込むことで、人の目からまったく見分けられなくなる。地元で樹脂を使った芸術作品を作っていたジョバンニ・カングリアートさんが、レンガやタイルなどと見分けられないほどでありながら、光を通す高分子化合物を見つけた。カングリアートさんは「イタリアだけでなく、フランスやスペイン、米国からも注文が来て追いつかない」と話す。

化合物は毒性もなく、リサイクルできる。荷重にも耐え、大気汚染物質や化学溶剤にも強い。「すべては化合物の濃度次第だ。人の目がだませる程度の量は必要だが、太陽光を遮るほど濃くてはいけない」

標準品が１ワットあたり１～２ユーロ（約２４０円）のところ、見えないソーラーは７ユーロ。カングリアートさんは「歴史的地区のために手作りしたものだから」と説明する。普及にはコストを下げることが必要だ。手作業に代わる製造機械を開発しようとネットを通じ資金を集めている。

（コリエレ・イノヴァツィオーネ〈イタリア〉）

リサイクルで世界平和を

朝日新聞

デロリアンに乗る日本環境設計の岩元美智彦さん＝２０１５年８月、千葉県成田市

今年で設立10年を迎えた日本環境設計（本社・東京都千代田区）は、資源のリサイクルに積極的に取り組んできた会社だ。その一例が衣服。同社は小売店に回収箱を置き、消費者が持ち込む古着などを集め、工場で再生処理する。

服の素材である綿は自社工場でエタノールに生まれ変わる。ポリエステルは協力会社で再生処理してきたが、今年中に自社工場で処理できるようになる。

処理の後の商品開発も手がける。たとえば、現在他社と共同で開発中の丈夫なビニール傘。使い捨てではなく、生地が取り換えられるように工夫している。

この会社が目指すのは、楽しくリサイクルに取り組むこと。息の長い事業を展開するためだ。社風の表れが、米ＳＦ映画「バック・トゥ・ザ・フューチャー」に登場するタイムマシン「デロリアン」を実際に走らせるイベント。燃料は回収した古着を再生し、生み出したエタノールだった。

この映画が大好きだという会長の岩元美智彦さんが着想し、作中でデロリアンがタイムスリップした年月日と同じ２０１５年10月21日に都内で開催。岩元さんは「世界の戦争の多くは石油など地下資源の争奪が原因で起きている。地上にある資源を循環させて、世界平和を実現させたい」と夢を語った。

（秋山訓子）

大気を浄化 ばい煙インク

THE HINDU ＠インド

「グラビキー研究所」の開発チームは手を汚しながら、ばい煙からインクをつくる

車の排気管から出るばい煙が、芸術の素材に生まれ変わる。車の排ガス対策に、インド南部のベンガルールの新興企業「グラビキー研究所」が取り組む。

グラビキー研究所はここ数年、ばい煙をインクに変える技術を開発してきた。開発チームは、車の排気管に取り付け、ばい煙を分離する「カーリンク」という装置をつくった。ばい煙は化学処理され炭素色素になる。この色素が原料となり、「エア・インク」という塗料になった。

カーリンクは、エンジンから排出される微粒子の95％を回収。インドの道路事情に合わせて設計され、素材や電子機器は耐熱・防水仕様となっている。

ばい煙の大部分は、化石燃料が不完全燃焼することで生まれる微粒子と炭素からなる。微粒子は、呼吸器の病気やがんの要因になる。環境団体が今年まとめた報告書によると、インドの都市のうち90％で大気汚染の基準値レベルを超えていた。

グラビキー研究所はクラウドファンディングによる資金集めで事業拡大をめざし、車だけでなく煙突や発電機からもばい煙を集める考えだ。研究所のアニルド・シャルマさんは「世界の黒い塗料のうち15％がエアー・インクになれば、隠された大気汚染に終止符が打てる」と語る。これまでに集めた微粒子の量から換算すると、1・6兆トン分の大気を浄化したことになるという。

（ヒンドゥー〈インド〉）

© 朝日新聞社　無断複製転載を禁じます。
すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。